

高崎市歴史民俗資料館 平成22年度企画展Ⅲ

ひな　　こんじゃくものがたり
「雛の今昔物語」



こちょう
胡蝶 (前：明治30年代、奥：大正時代)

3・4世丸平作　　個人蔵

2011. 2/22 (火) ~ 4/10 (日)　　高崎市歴史民俗資料館

入館無料

ごあいさつ

本来三月の節句は「上巳節供」^{じょうしせつく}「雛節供」^{ひなせつく}といい、山野で花見などを行なったことから、春の農作業に先駆けて田の神を迎える山籠り^{やまごも}の儀礼とも考えられています。そして雛人形は三月上旬の農事前^{けが}に穢れ^{はら}を祓うために流す人形^{かたしろ}（形代）が起源という説もあります。また雛祭りは、宮中の「ひひな遊び」の人形遊びがはじまりともいわれています。

江戸時代に入ると、雛人形は武家や商家などが競って飾り付け、幕府から禁止令が何度も出るほど広まりました。京都の公家は古式を考証した「有職雛」^{ゆうそくびな}を生み出し、優秀な人形師も出ています。近現代には、庶民のお雛様として御殿飾りや段（壇）飾りも作られるようになりました。

日本人が、年中行事の中で人形を飾り、子どもの健やかな成長を祝うという習慣は、世界でも稀なものとされています。展示を通じて、雛人形の伝統の「美」と、人形師たちの「技」、そして子どもの健やかな成長を願う親たちの、時代を越えた愛情を知って頂く機会になれば幸いです。

開催にあたりまして、ご指導頂き貴重なコレクションを提供して頂きました石原富士雄氏に、厚く御礼申し上げる次第です。

平成23年2月吉日

高崎市歴史民俗資料館

天神様と節供

天神様とは、平安時代の学者であり後に政治家にもなった菅原道真(849~903)の事です。この道真を祭神とする天神社や天満宮は、全国で約1万2千社余りを数え、五穀豊穰の稲荷社、武運長久の八幡社と並んで広範な分布を誇っています。そのご利益のほとんどが学問神としてのものであり、付随して農耕・雷除け・疫病退散などのご神徳もあげられています。この天神信仰から生まれ、その姿を象ったのが「天神人形」です。江戸時代、天神は学問・書道の神として寺子屋を中心に子供達に親しまれ、正月や三月、五月の節供には「雛天神」としてこれを飾りました。この風習は現在でも北陸や山陰地方などに残っています。節供前には天神市の立つ地方もあり、天神は農耕神としても広く信仰された事から、全国各地に郷土色に富んだ各種の天神人形が現れました。



さいかいはいる
西海配流が決まり庭の梅

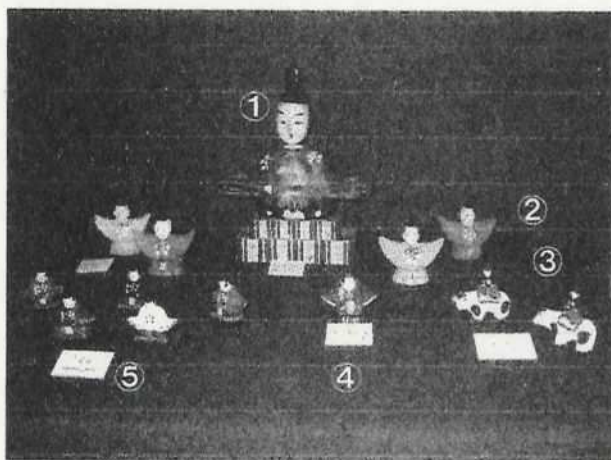
を見て歌を詠む道真

こちふ にお おこ うめ はな
「東風吹かば 匂い起せよ梅の花
あなご はる わす
主なしとて春を忘るな」

ださいふ
大宰府に配流になった道真が、
いただき てんどう
天拝山の頂より天道に無実を
訴えている。



まつざきてんじんえんぎ
『松崎天神縁起』より



①天神 (福島県会津若松市)

②岡村天神 (神奈川県横浜市磯子区・
岡村天満宮)

③小幡土人形 牛乗り天神
(滋賀県東近江市五箇荘小幡町)

④赤兵子天神 (大分県中津市)

⑤小幡土人形 天神
(滋賀県東近江市五箇荘小幡町)

節供のはじまり

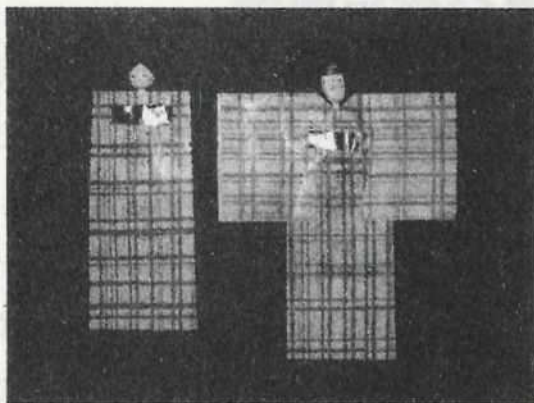
三月三日に行われる上巳^{じょうし}の節供の事で桃の節供ともいいます⁽¹⁾。上巳とは旧暦上旬の巳の日の事で、人日^{じんじつ}（正月七日）、端午^{たんご}（五月五日）、七夕^{しちせき}（七月七日）、重陽^{ちやうよう}（九月九日）とともに五節供の一つです。古来中国ではこの日に川で身を清め不浄を祓^{はら}う習慣がありました。これが平安時代にわが国に取り入れられ、宮中では曲水^{きよくすい}の宴を張り、祓えを行うようになりました。以降曲水の宴は廃^{すた}れましたが、形代^{かたしろ}として人形を作り、川や海に流す「流し雛」の風習は現在でも残っています。上巳の祓えは江戸時代の元禄年間（1688～1704）以降、雛祭りとして庶民の間に広まり、桃の花・白酒^{しろざけ}・菱餅^{ひしもち}などを添えて、女子の健やかな成長を願う行事となりました。

また五月五日の「端午の節供」は、宮廷行事の「菖蒲鬘^{しょうぶかつら}」が「菖蒲兜^{しょうぶかぶと}」に変化して男児の祭事となり、七月七日の「七夕」は宮廷行事の牽牛^{けんぎゅう}と織女^{しょくじょ}の竹飾りが、江戸期の寺子屋の子ども達の大切な行事として普及していきましだ⁽²⁾。

雛の源流を求めて

日本の人形の歴史を紐解けば、縄文時代の土偶^{どぐう}や古墳時代の埴輪^{はにわ}、飛鳥・奈良時代の仏像に行き着きますが、それらは全て崇拝のための彫像といえます。これらは雛人形とは関係が薄いものです。

雛人形の源流をさかのぼると、三つの流れがあったとされます。①「天児^{あまがつ}」「這子^{ぼうこ}」に代表され、形代とよばれる信仰物で、紙雛などの郷土玩具に残されている⁽³⁾、②調度品としての鑑賞用の人形で、徳川将軍綱吉の貞享～元禄期^(1684~1704)に発生した嵯峨^さ人形にはじまる、③子どもの遊び相手になった愛玩人形^{かみしもびな すわりびな}で、祢雛^{ねひな}（坐雛）などもその一つです。これに宮廷の節供「ひひな遊び」が結びつきました⁽⁴⁾。



神雛（宮崎市青島神社・本館蔵）

(1) 節句は供え物をして祭りをする折り目の日の意味で「節供」といった。(2) 短冊に字を書く事は、字の習熟の成果を親や師匠に見せるだけではなく、神（天神）への奉納の意味も込められた。

(3) 「這子」は「ほうこうさん」「猿ぼぼ」など郷土玩具にもある。(4) 『源氏物語』『紅葉賀』は宮廷の「ひひな遊び」を表している。

初期の雛人形は「天児」「這子」の影響で、紙製の「立雛」が中心でしたが、頭部が木製などになり、衣装に裂が使われるようになりました。やがて「坐雛」へ移行し、宮廷の雛は「次郎左衛門雛」で一旦完成します。一方、江戸を中心とした「町雛」は「享保雛」「古今雛」を生み出します。その後京都では「有職雛」が考案されます。



立雛(大:江戸中期、小:明治期)

立雛は雛人形の成立過程で、最も古い形と考えられています。元々は全体が紙製でしたが、時代が進むにつれ木や裂が使われるようになりました。(個人蔵)



土雛(大正～昭和初期)

土製の人形の歴史は江戸時代に遡り、仙台の堤人形・京都の伏見人形・福岡の博多人形に代表されます。一方土雛は庶民の節供人形として広く親しまれました。(個人蔵)

雛人形と高崎

日本の三大雛人形師といわれる原舟月・仲秀英・川端玉山は、多くの優れた作品を残し、中でも江戸の舟月は、京雛に対して古今雛を作り出しました。雛の文化は東西に大きく分かれ、西毛地域は中山道で京都・江戸と結びついていましたが、近郊にも岩槻・鴻巣などの人形の産地がありました。(5) 一方、近世の高崎でも節供の行事は広く行われていました。公家の行事にとどまらず、武家社会でも五節供を重んじていた事から、高崎藩主松平(大河内)輝承の記録には、五節句に江戸城へ登城し、大奥にご機嫌伺いをしています。更に『閭里歳時記』(6)には、高崎城下の町人たちが3月に赤飯を3回炊いて祝

(5) 日光御成街道の宿場町として発展した岩槻は、日光東照宮造営の大工たちが移住し、箆箆や下駄の産地となった。その木屑が雛の頭部の材料になり、人形の生産が盛んになったという。(6) 『閭里歳時記』とは高崎藩士の川野辺寛が著した高崎城下の民俗誌のこと。近世期の習俗を知るうえでも貴重な資料である。

った事が記されています。また市内阿久津町の農家の記録には、2月28日に雛を出して飾りつけをはじめ、29日には餅草もちくさを採り、3月1日には餅を搗ういてご馳走を作り、家の内外を清掃して髪を整え、3日には料理を作りお祝いをして、4日は「せちま」といい「大遊日(休日)」で、5日に雛を片付けています。

有職雛ゆうそくびな(文政五年:1826の墨書あり)

朝廷や武家の古来の法令・儀式・風習を研究する学問ゆうそくこじつを有職故実といいますが、これにもとづいて、平安時代以来の朝廷や武家の決まり、家格、伝統、位階いがいにならった模様の装束をつけた雛人形を有職雛ゆうそくびなといいます。唐様の雲鶴・立湧・小葵・浮線からよう うんかく たちわき こあおい ふせんりょう綾・幸菱など日本の模様の基調をなす衣装をまとい

ています。男雛は直衣、女雛は冠かんむりをかぶらない平常服がほとんどです。宝暦年間(1751~64)に公家

が注文して作らせたのが始まりで、明治以降にこの名で呼ばれています。また公卿が特別に作らせたものなので、一般に売り出される事はありませんでした。(本館蔵)



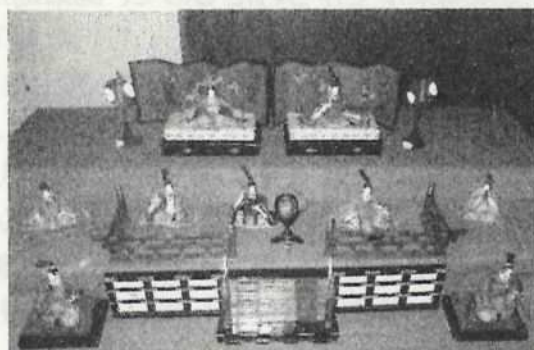
古今雛こきんびな(幕末期)

江戸時代中期、明和安永年間(1764~81)に上野池之端いげの はたの雛問屋大榎屋半兵衛が、人形師原舟月はらしゅうげつに作らせたものが古今雛の始まりとされています。古代と今様のものとが折衷せっちゅうされ、顔は写実的でガラス眼をはめ、衣装は金襴きんらんや緋子ひこ、縫い取りをした華やかなものです。舟月の人形は高価で、当時1両で3俵の米が買えた時代に、人形一対が二両から三両の値段でした。現在の雛人形は古今雛の系譜をたどっています。資料は宝冠たけがきや「強着け」に古今雛の形が見えますが、胡座姿などに京雛の影響がうかがえます。(本館蔵)



古今雛と雅楽士/隨身一式ががくし(江戸後期)

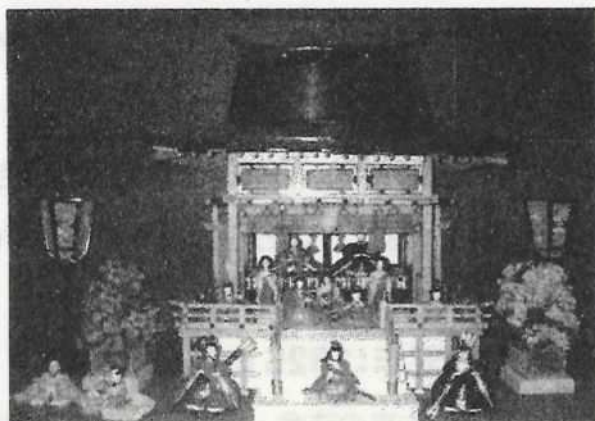
三大名工の一人で山車人形師の仲秀英によるものです。内裏雛に五人囃子だしにぎょうし(地謡・笛・小鼓・大鼓・太鼓)ではなく、雅楽士なかしゅうえい(笙・太鼓・火炎太鼓・龍笛・琴)と隨身で一式となっている珍しいものです。(個人蔵)



しらきこてんかざ

白木御殿飾り(大正13・14年以前製作)

京風の雛で、特に内裏雛と隨身は、京都の人形師の4世・5世丸平^{まるへい}が製作したものと考えられています。資料は明治期から東京に進出した丸平が、三越で販売したもので、『源氏物語』の「ひひな遊び」の様子を表した「紅葉賀^{もみじが}」の場面を再現しています。(個人蔵)



ハイカラ人形(明治後期)

女性が和装に靴を履いている人形です。当時の女学生は、近代的な女性の象徴であり、着物に靴やブーツを履くファッションは羨望的でした。人形としては浮世人形をベースにしていると思われます。当時の世相を反映したこの人形の姿は、現在でも女子学生の卒業式の服装に見る事ができます。(本館蔵)

うきよ

浮世人形(大正～昭和初期)

埼玉県鴻巣市で作られたもので、大正時代から昭和初期が最盛期であった雛です。台座が付いた形で桐の箱に入れられ、近所親戚からの祝い物として届けられました。人形の題材は能や歌舞伎、民話から取られた物が多く、寓意的なものから単に人形を楽しむためのものまで様々な形態が作られました。やがて浮世人形は製作されなくなり、「藤娘」や「潮汲み」などのガラスケース入りの舞踊人形が多く作られるようになります。資料は宝冠をかぶった女性が桑の枝を持つ「蚕神」です。



かみしもびな
神雛

埼玉県鴻巣市で作られたもので、関東地方では神人形、坐雛^{すわりひな}、作雛^{さくひな}、蚕雛^{かいこひな}ともいわれた雛です。豊作を祈る作農雛として女子のいない家でも飾られ、昭和10年代くらいまで作られていました。安価という事もあって、近所親戚からの祝い物として届けられました。人形には女子と男子があるといわれますが区別ははっきりしません。東北や北関東では五人囃子の代わりに並べたりしました。実際に家庭の子供が人形遊びをした雛なので、損傷も激しく多くが捨てられ、数が少なくなった現在では貴重なものとなっています。



現代人と雛祭り

近代以降、百貨店による販売が始まると、御殿飾りや段(壇)飾りが一般的になりました。また「祢雛」「浮世人形」「^{びょうにんぎょう}舞踊人形」は、女子の初節供の贈り雛として好まれ、普及していきます。現在では海外で作られた雛人形も珍しくありませんが、子どもの健やかな成長の願いは、少しも色褪せるものではありません。雛祭りは日本が世界に誇る、後世に残すべき大切な文化の一つだと思われます。

全国には雛祭りに関する民俗事例が多く残されています。高崎地域の節供に共通している事例は、お餅や寿司（巻き寿司・いなり寿司）を食べ、雛人形を雛市で買った事です。が、その他各地域には様々な特色があります。

- ① 寺尾地区では芋や竹輪、油揚げなどを煮しめにして、雛は高崎の雛市で買い、3月5日には片付けた。節供には雛のために金魚を買ったといい、2月の下旬には金魚売りが来た。（桐生市などにも同じような習慣がある）
- ② 豊岡地区では菱餅・煮しめ・あられ・寿司（いなり寿司・巻き寿司）を食べた。初節供は特に喜ばれ、2月20日には雛を出し、実家の父親が反物やお金・祢雛を届けた。人形は子供と同じだから「はげたものも大事に下さい」と言われた。
- ③ 倉賀野地区では3月1日に餅つきをして菱餅にした。倉賀野駅前や倉賀野神社に雛市が立った。祢雛は坐雛といい、傷むと烏川に流した。
- ④ 阿久津地区では雛は2月28日頃には出し、3月5日を過ぎたらしめる方が良いといった。餅を搗いて寿司を作った。菱餅は白・赤・白にした。
- ⑤ 貝沢地区では3月3日には紅白の餅を搗いた。
- ⑥ 小埴地区では節供前の良い日に雛を出し、8日くらいには片付けた。
- ⑦ 大類地区では「お節供に雛を出し忘れると人形が泣く」といった。菱餅（白い餅と蓬を入れた草餅と、食紅を重ねたもの）を2月28日に搗いた。雛あられは餅の切れ端を細かく切って干し、^{ほうろく}焙烙で炒った。巻寿司や稲荷寿司を供えた。
- ⑧ 高崎東部地区では玉村の雛市へ出かけた。
- ⑨ 群馬地区では青菜の汁に餅を入れた雑煮を作り、お雛様にあげてから3月8日にしまった。
- ⑩ 倉渕地区では赤青白の12重ねか15重ねの大きな菱餅が喜ばれた。また節供には、お嫁さんが実家へ帰り泊まる事ができた。室田や原市、中之条に雛市が立ち、雛を買いに出かけた。

御殿飾り(昭和30年代)

高度経済成長期は、御殿飾りも派手で勢いのある人形や御殿が好まれました。（本館蔵）



『雛の今昔物語』資料目録

NO	資料名	産地または年代	数量	所蔵
1	天神	福島県会津若松市	1	本館
2	天神	埼玉県鴻巣市	4	本館
3	岡村天神	神奈川県横浜市磯子区岡村天満宮	4	本館
4	流し雛	鳥取県鳥取市	1	本館
5	紙雛	宮崎県宮崎市青島神社	1対	本館
6	小幡土人形(牛乗り天神)	滋賀県東近江市五箇荘小幡町	2	本館
7	小幡土人形(天神)	滋賀県東近江市五箇荘小幡町	5	本館
8	赤兵子天神	大分県中津市	1	本館
9	化粧道具		1式	本館
10	雛道具		1式	本館
11	有職雛	文政9年(1826)の墨書あり	1対	本館
12	土雛	大正～昭和初期	1対	石原富士雄氏
13	陶磁器雛	昭和時代	1対	石原富士雄氏
14	立雛	幕末	1対	石原富士雄氏
15	立雛男(大・小)	大:江戸中期・小:明治期	各1	石原富士雄氏
16	白木御殿飾り(丸平作)	大正13～14年以前	1式	石原富士雄氏
17	胡蝶	明治30年代	1組	石原富士雄氏
18	胡蝶	大正時代	1組	石原富士雄氏
19	古今雛	江戸後期	1対	石原富士雄氏
20	貝合わせ	江戸時代	46	石原富士雄氏
21	古今雛と雅楽(仲秀英作)	江戸後期	1式	石原富士雄氏
22	古今雛	幕末	1対	石原富士雄氏
23	古今雛	幕末	1対	本館
24	親王雛	明治時代	1対	本館
25	芥子雛1式	大正～昭和初期	2	本館
26	抱き人形(男児・女児)	大正時代	1組	本館
27	抱き人形(女児)		2	本館
28	掛け軸雛	昭和初期、佐野市	1	本館
29	婚礼飾り掛け軸	昭和初期、佐野市	1	本館
30	押絵掛け軸雛	昭和初期、所沢市	1	本館
31	ハイカラ人形	明治後期	1	本館
32	芥子雛1式	大正～昭和初期、鴻巣市	2	本館
33	浮世人形(高砂)	大正～昭和初期、鴻巣市	3	本館
34	浮世人形(女官)	大正～昭和初期、鴻巣市	3	本館
35	浮世人形(蚕神)	大正～昭和初期、鴻巣市	2	本館
36	浮世人形(汐汲み)	大正～昭和初期、鴻巣市	2	本館
37	浮世人形(胡蝶)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
38	浮世人形(鶴亀)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
39	浮世人形(乙姫)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
40	浮世人形(三条の小鍛冶)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
41	浮世人形(三番叟)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
42	浮世人形(狛引き)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
42	浮世人形(狸々)	大正～昭和初期、鴻巣市	1	本館
43	浮世人形	大正～昭和初期、鴻巣市	3	本館

『雛の今昔物語』資料目録

44	御殿飾り1式	昭和30年代	1	本館
45	舞踊人形	昭和30～50年代	5	本館
46	押絵雛(牛乗り天神)	明治～大正時代、秋田県	2	石原富士雄氏
47	押絵雛(隨身)	明治～大正時代、秋田県	2	石原富士雄氏
48	押絵雛(童子)	明治～大正時代、秋田県	2	石原富士雄氏
49	創作和紙雛1式	石原富士雄氏製作	1	石原富士雄氏
50	袴雛	大正～昭和初期	22	本館

※郷土玩具については特に年代を示していません。 人形173体、御道具181点

雅楽土雛 江戸後期の雛

雛本	1	外平〇〇〇〇〇〇	左ノ〇〇〇〇〇〇	54
雛本	2	外平〇〇〇〇〇〇	新人雛	54
五郎土雛	2	外平〇〇〇〇〇〇	(新天〇〇〇〇)雛	54
五郎土雛	2	外平〇〇〇〇〇〇	(新天〇〇〇〇)雛	54
五郎土雛	2	外平〇〇〇〇〇〇	(新天〇〇〇〇)雛	54
五郎土雛	1	外平〇〇〇〇〇〇	(新天〇〇〇〇)雛	54
雛本	22	外平〇〇〇〇〇〇	(新天〇〇〇〇)雛	54

高181 長取雛、高171 雛人、入分ミナミ、外平〇〇〇〇〇〇、外平〇〇〇〇〇〇、長取土雛



がくしひな
雅楽土雛 (江戸後期・仲秀英作)

個人蔵

平成22年度企画展3

「雛の今昔物語」

平成23年2月22日(火)～

4月10日(日)

企画・編集・発行 高崎市歴史民俗資料館

〒370-0027 群馬県高崎市上滝町 1058

Tel/Fax 027(352)1261

E-mail: rekimin@city.takasaki.gunma.jp

URL: http://www.city.takasaki.gunma.jp/